

紫式部の表現

——宣孝の死を契機に——

廣 田 収

五六

それまでの結婚生活が幸福であるにせよ、不幸であるにせよ、宣孝との婚姻関係が二年余で突然もぎとられよるように閉じられた。

そのことよって、宣孝を恐らく疫病で失った、以後の紫式部の内面に深い陰翳を落とすことになった、ということが諸見^①によつて論じられてきた。源氏物語が（もしくはその原型となるべき習作の物語が）切実な彼女の内面を背負つて創作の企てられる端緒なり契機^②なりは、寡居時代出仕前のこの時期にあるのかどうか、ということも改めて問題となるであろうが、特に桐壺巻の沈痛な嘆き深い色調には、夫を亡くしたのちの作者の筆が加わっているとみてよいと思われる。^③紫式部集の研究が進むにつれて、勝気でわがままを言うことが許されていた少女時代の紫式部^④が明らかにされつつあるが故に、紫式部が宣孝の死をどう受けとめたかということが非常に重大な問題である。寡居時代出仕前あるいはそれ以前にも紫式部がうた

をうたっていたことが事実であつてみれば、そうして夫の死別後、紫式部日記に覗えるように、彼女のうすら寒い生活を凌いでいく文学宮為が、なぜ物語でなければならぬのか、あるいはそうした物語る行為が宣孝の死の問題とどのように関わっているのだろうか。ここでは、宣孝の死がもたらした作者の内面と、物語への影響ということについて論じてみたい。

1、消えぬ間の身をも知るく

紫式部を読んでいくと、夕暮れに宣孝と紫式部とが交わした歌に続いて「西の海の人」とおぼしき、紫式部の女友達の死に対する悲しみの歌があり、続いてきわめて唐突に、宣孝が既に亡き人となつた後の紫式部の歌が並んでいることに驚かざるをえない。四二番以降の歌には、贈答という人間関係上の外的要請にもとづくにもかか

わらず、亡き夫を悼み悲しむ気持ちが滲むように感じ取ることができ
る。だが、他の誰彼に手渡し訴えるというわけではない独詠と思し
き歌にさえ、その悲嘆が直截的に解き放たれることの見られる例は
稀である。最近、清水好子氏はこの事実に触れて、五三番の歌

世の中のさはかしき比朝かほを 人のもとへやる ● 古

同所にてたてまつる として

消えぬ間の身をもしるく朝顔の

露とあらそふ世を歎く哉

を材料にして、紫式部の歌の特徴を論じ、次のような諸点を挙げて
おられる。^⑤

1 式部は夫が死んで悲しいと言も言わない。ただ(中略)人間
の生命全般のことにしてしまう。

2 この歌は、彼女の出遭った死が、ただ離れがたい者を奪い去っ
た、生身を割く痛みだけでなしに、もつと複雑な失意を残したこ
とを語るものではなからうか。

3 家集に残る紫式部の歌は、夫の死後(中略)まるで人が変わった
ように、用心深く慎ましい歌が目につくから、宣孝を喪ったこと
は彼女に大きな打撃をあたえたにちがいない。だのに、式部には
和泉式部のように心を全部歌にむけて解き放つことがなかった。
と。確かに、かかる指摘は首肯されるべき卓見である。が、何故そ

紫式部の表現

うなのか、更にもうすこし詳細に検討していくならば、感情の解放
のしかたが、両者にとつてうたうということの中に、表現、認識の
問題としてどのように異なっているのかを考えることができるので
はないかと思われる。清水氏が挙げている例証の、和泉式部の独詠
歌は九首であるが、これらから帰納できる歌の性格は、

かひなくてさすがに絶えぬ命かな

心を玉の緒にしよらねば

捨て果てんと思ふさへこそ悲しけれ

君に馴れにし我が身と思へば

語らひし声ぞ恋しきおもかげは

ありしそながら物もいはねば

というふうに、和泉式部のうたの場合、傍線部分のように、直線的
な抒情が上の句に投げ出され、下句との関係は倒置法になっ
ている。それに、この倒置はすべて順接なのであって、下句は条件節の
役割を果たすことになる。清水氏の九例中七例(うち一例は反語の
倒置)についてそのことがいえる。こうした表現の性格は、紫式部
集五三番と同じ素材、疫病と死と露あるいは朝顔という素材とイメ
ージとを用いて、亡き人を追慕しうたっている歌を「和泉式部歌

集」(岩波文庫)から抽出分析してみても、上記の性格は基本的に同じである。(番号は岩波文庫統集による)

なくなりにたりける人の持たりける物の中にあさかほを、
りからしてありけるをみて

1096 朝かほを折りてみむとやおもひけん

露よりさきにきえにける身を

世の中はかなき事などいひて榿花のあるをみて

1296 はかなきは我か身なりけりあさがほの

あしたの露もおきてみてまし

よのなかさがかしうなりて人のかたはしよりなくなるころ

人に

1363 しらしかし花のことにおく露の

いつれともなきなかにきえなは

和泉式部の抒情は上句にやはり投げ出される。これらの例では「はかなき」身」の比喩としてのイメージが、「露」として出されてくるのだが、これは既に古今集以来の伝統的発想である。和泉式部の歌のイメージは「露」を介して「世の中」とわが「身」のはかなさが関係づけられるのだが、紫式部においては「露」は「露と争ふ世」

と発想される。和泉式部の「置く露」よりも動的に捉えられている処が注目される。しかし、そのことだけに相違はとどまらない。和泉式部の、周囲の者を次々に止みがたい疫病の蔓延によって奪われていく危機的な存在感覚は右の例だけではなく、数多いのだが、紫式部の場合の表現は和泉式部のうたの表現よりも屈折しているということである。和泉式部が全体重をかけて「はかなきは我が身なりけり」と嘆く、自己の存在への不安を、紫式部はもはや自明の事柄であるかのように

消えぬ間の身をも知るく

と上句に纏めて相対化してしまうのである。つまり、心の中の対立が歌の上句と下句との対立として表現されてくるということである。

紫式部の、しかも宣孝死後間もない頃の歌に、心の中の対立や矛盾なりが表現上の関係として現われていることが、竹内美千代氏によつてみごとに指摘されている。五二―五六番について、

この五首は、心があればこれと思ひ乱れるのを、肯定と否定を用い、逆接の接続助詞を配して、心の屈折を効果的に表現しているとのべ、それぞれ

薄きを見——つつ——薄きとも見ず

消えぬまの身をも——知る知る——露とあらそふ

世を愛しと厭ふ——ものから——ゆく末を祈る

心に身をばまかせぬ——ど——身に従ふ心

思ひ知れ——ども——思ひ知られず

と分析例証しておられる。

この五三番の朝顔の歌の表現の悶えは、じつにこの相対化あるいは和泉式部とは対照的なこの逆接の語法にかかっている。紫式部のこの歌においては、無常に対する、体験から引き出してきた理性的観念的認識と、いやというほど知っているはずなのに割り切れないという感性的認識との対立によって分裂していく自己の内面を、一首の中に織り込もうとする志向が働いている。だから、歌は、否定相に対する肯定相の提出という形をとるが、イメージの飛躍ということとは少なく、対立を統一しようとする論理が強く感じられる。じつは、そのことが、物語的事であることになるのだと考えられるのである。

2、死——喪失と季節

死を悲しむ表現には、かかる、死に対する認識の問題がまず先行すると考えられる。上に見たように、紫式部には物語にも歌にも賭けようとするものが等質であるために、その機能面からして物語ることが選ばれるのだが、そうすると、死と死によって引き

紫式部の表現

出される悲しみに関する表現には、それぞれのような特徴が伴ってくるのであろうか。その意味で注目できるのは貫之の哀傷歌である。(引用は日本古典全書 土佐日記)

紀友則うせたるときによる

761 明日知らぬわが身と思へど暮れぬ間の

今日は人こそ悲しかりけれ

あるじうせたる家に桜の花を見てよめる

763 色も香もむかしの濃さに匂へども

植まけむ人の影ぞ恋しき

世の中はかなきことを見て

767 憂けれども生けるはさてもあるものを

死ぬるのみこそ悲しかりけれ

768 昨日まであひ見し人の今日なきは

山の雲とぞたなびきにける

かくて、貫之には、自然が昔と今と常住であることに對して、人の生命の果かなさが捉えられるのであり、昨日、昔と今日、今という形で「対立」は時の問題として捉えられ易いように思われる。その点から、貫之の日記の方法も論じられようのである。が、今注意したいのは七六三のように、めぐりくる春、親しきものを喪った春

がめぐりくるとき、それは主なきやどにも桜の花が、散るのでなく、絢爛と咲くときに、貫之は悲しみと恋しさをうたわざるをえないのだ。死はかくて季節のめぐりの中に捉えられることになる。

この例は、哀傷が秋という季節と合着してくる、なかでも古今集以後の常識的な感覚からは異質に見える。しかし、それはひとり貫之に限られるのではない。和泉式部日記の冒頭は次のように記されている。^⑩

夢よりもはかなき世のなかをなげきわびつゝ、明かし暮すほどに、四月十余日にもなりぬれば、木のした暗がりもてゆく。築地うへへの草あをやかなるも、人はことに目もとゞめぬを、あはれとながむるほどに……

彈正宮を喪った作者に、「四月十余日」が訪れる。それは「やがてその一周忌がようとして」いる。式部の胸中には、いろいろな思い出が去来したことであろう。^⑪ということなのではない。去年の六月十三日。その頃はまだ暑い夏の最中であった。そして今年、春がゆく「木の下くらがりもてゆく」「四月十余日」になったということは、まさしく、あの思い出すに忍びない「夏」が再びめぐり来た、という感覚なのだ。^⑫五月であってはいけない。夏が春と別れをつけて夏を感じさせ始める「十余日」目ごろでなければならぬ。ここにみられる「あはれとながむる」作者の想念には、厳然として

循環し当来する季節としての夏への臨場感が下敷きになっている。

諸説は和泉式部の、繁る青葉や草への注目が著しいことを教えている。他人は気に止めぬ「あをやかなる」「草」、木の下暗い昼の陽光は土の熱気とともに、むっとする草いきれさえ作者を包もうとする。それはまさしく、臃ろな光線の下で体液と性液とにまみれた交歓の、和泉式部の嗅覚の記憶である。橘の花の香にふと「昔の人の袖の香」を覚醒する彼女が次に続くことも意味深い。作者の「ながめ」は明かるい光線の中で、樹影の暗がりの中へ視線をうつしながら、はてしなく昔日の記憶の中へ溶け込んでいこうとするのだ。和泉式部にとつて、「夏」は愛するものの肉体を喪失した季節である。和泉式部日記が自筆他筆であるを問わず、そうした手ごたえある季節への感覚を、その冒頭の構造ははっきりと示している。季節の感覚が仏教的無常感を装いつつ、しっかりと流れていることを、広川勝美先生が明らかにされたように例えば、紫式部日記において、秋は新しい生命の誕生を迎えねばならない季節であると同時に、作者の黯淡たる色調をもつ心象風景のそれである。源氏物語の作中人物が死にゆく季節は概して秋であり、秋でなければならぬとする季節感に支えられている。それは「実りの秋」から「哀傷の秋」へと逆転した、古今集の季節感の強い影響下に立っている。このように、死と死に対する悲しみの表現には自然とりわけ季節が、^⑬

必然的な関係の上に選り取られていることになる。

紫式部集が、秋の歌から始まることは、こう考えてくると果たして偶然なのであろうか。春夏秋冬恋と続く部立の、勅撰集の編纂意識から自由であり、自らの編纂意識がみられることは注意してよい。今、国歌大観で馬内侍集あたりまでの五十の私家集・諸家集をみても、その差は歴然としている。季節にのみ限定して冒頭を調べてみると、

1 柿本集×	20 赤人集△	39 道長集△
2 躬恒 △	遍昭 △物語風	40 本院 侍従 物語風
3 素性 △	源順 ○物語風	清少 △
4 家持 ○	元輔 秋	和泉 ○
5 業平 △	高光 冬	紫式部秋
6 兼輔 △	25 友則 △	伊勢 大輔 △
7 敦忠 物語風	小町 △	45 曾丹 ○
公忠 ○	忠岑 ×	実方 ×
斎宮 物語風	頼基 △	公任 △
10 敏行 △	重之 ×	輔親 ×
宗行 ×	30 信明 △	長能 ×
清正 ×秋	元真 ○	50 馬内侍△
興風 △	忠見 ○	

紫式部の表現

是則 ○ 中務 △

(参考¹⁵)

15 小大夫△	千里 ○	35 元良 親王御 物語風	1 伝道綱 冬
能宣 ○		兼盛 ○	2 御形 宣旨 冬
貫之 ○夏	高明 ×	伊勢 物語風	3 賀茂女 ○
伊勢 物語風	師民 ○	4 重之女 ○	

5 清少 × 9 思女集 × 凡例

6 大斎院△、御 10 大式 △ 三位

7 赤染 △物語風

8 相模 秋 △冒頭歌春 △冒頭雑季(季ナシモ)

南波浩先生は、紫式部集について冒頭の二首には「人事の自然形象化、あるいは自然の人事化」ということを、彼女の詠法ないし着想の特質のひとつとして見て居られる。彼女たちは別れの場で悲しい——地方へ赴任しなければならぬ父たちと共に、青春を京から離れて過ぎなければならぬ——境遇を嘆き合ったことであろう。それはまた「愛苦離別・会者定離の常理を超えた、受領階層の子女の典型的な生活感情の反映」でもあったのだらう。しかし、若き日の式部の出会わざるをえなかったこうした別離が秋でなければなら

ず、

まがきの虫とめがたき

と発想されるためには、このときすでに彼女は、自己を操る運命的なるものに——ということとは歴史意識に——深く向い合っていたということになるであろう。そして虫とどめることはできず、今秋果てる日をせいいっぱいに鳴いているその時の流れというその非情なる運行に対する嘆きは、それがうたわれた場の季節が如何なる日時であれ、ゆく秋であることにおいて最もふさわしい。

加うるに冒頭のうたが、贈答という形にならず、彼女の内面に向って独詠されていることにも注意したい。これら冒頭に対応する末尾三首を見てもよい。というのは三谷邦明氏は「如賀少納言」という「架空の人物」を配置することによって「対象化」「虚構の二重化」が見られる。それが源氏物語の方法であると論じるが、私はそのことよりも、この三首が晩年の作者の編纂時に近いいうたであるということを中心したい。つまり「人の世のあはれを知るぞかつはかなしき」↓「誰か世にながらへて見む」↓「けふのあはれはあすのわが身を」と二転三転していく受け答えの動態のあり方である。別離」はここに来世に向かう自己の問題として詠われている。母と幼い頃死別し、友と別れ西の海に彼女を失い、姉に、そして夫にも死別した彼女の伝記的事実と考え合わせると、晩年気付いたときに

は、人と別れることが生きて来ることであったと、自己の半生を回顧した作者が、そのように巻首と末尾に別離のうたを配したのではあるまいか。清水氏の指摘する「聞怨型の歌が少ない」ことも「別離」の生涯と観ずる晩年のある時期の紫式部には、そうした歌にたいして意味を感じなかった所為であろう。宣孝の死の突然を思わせる配列も、そのようにして理會することができるといえる。現世でのさまざまな別れ、現世から来世への別れ、宣孝の死を境にして、自己が救われぬものであったと言いつうになる自己を抑えかねていた晩年のある時期の紫式部を考へてみることはできるであろう。

3、物語を動かす力と死のかげり

それでは集や日記ではなく、源氏物語において、宣孝の死と、物語における死の認識、そうして表現が季節とどう関わり、物語はどのように展かれていくかを考へてみたい。

かつての季節論は単に背景として静的にしか捉えられていなかった。しかし最近、秋山虔氏は、人間と自然との乖離の体験が、言葉の世界を組成することによって自然を回復しようとする精神運動の一環として、古今集の四季歌を捉え、物語を内部から推進していく力を循環する年すなわち季節のめぐりであるとして、

源氏物語の世界の主題的に深化していく過程に纏絡し、それを環

きとめ、堰きとめることがやがては推進することになる「もの
あはれ」の美意識や情感^⑨

というものを考えておられる。例えば亡き者を悼む場面として、秋
という季節のすぐれて印象的な桐壺巻は、従来さまざまに論じられ
てきたし、源氏物語が他の物語を引き離したのには「ロマンからヌ
ヴェルへ」の飛躍が、何故という疑問を孕んだ文体として成立しえ
たことよって可能になったという所説は正しいのであろう。だが
桐壺巻の、いわゆる三つの構成部分なり三つの虚構軸^⑩なりが、どの
ように統一されていくのか、すなわち物語の進行はどのような形を
とっているかを考えてみなければならぬと考えられる。そうした
とき、池田勉氏の次のことは、穏やかだが、物語の方法について
根底的な問題を投げかけているように思われる。

桐壺巻で（中略）その印象批評の拠ってくるところは、桐壺巻の
前半部すなわち若宮の生まれたのちの、更衣と帝との死別の悲し
み、さらに、更衣を喪った帝が傷心の中にも若宮を思って、ゆげ
ひの命婦を亡き更衣の里邸につかわした、あの一連の哀愁にみち
た心情の場面を物語る部分であろうか。^⑪

とのべておられる。なぜ、そうした場面に我々が引き付けられるの
かということ、今物語の側に問うとするならば、それは、物語に
敷設された宮廷社会に、桐壺更衣を帝の寵愛の下に生かしてみよう

ならば、あまりにも明らかに論理的に死へと向かわざるをえない、
そうした第一の主題に対して、第二のそれがあまりにも詩的である
からに外ならない。いわばそうした論理の冷ややかさに対する叙情
性という照応ゆえに、野分以下の段はよりきわやかに叙情的なもの
となっているからである。光源氏の十数年間を一気に語る桐壺巻の
第三の部分に比べてみれば、この段の時の短かさは量的には取るに
足りないものである。

野分たちてにはかに肌寒き夕暮の程つねよりもおぼし出づること
多くて

と、ひとり寝る帝には、更衣を喪った夏とちがひ、野分去った為立
つ風の秋の肌寒さ——触觉——ゆえに亡き人进行「つねよりもお
ぼしいづること多く」なりゆくのだ。そうした帝がこらえかねて、
里に命婦を遣わした「夕月夜のをかしき程」から「月は入りがた
の」までの、一夜にさえも満たぬ静濼のわずかな時の間にすぎな
い。露しげき葎の宿に暮らす更衣の母の私語を、そのわずかな時の
しめやかさの中に、できるかぎりおし広げ、更衣の母が、行く時の
流れを堰きとめ惜しみ、その哀悼を長からしめ深からしめようとす
る作者の意図は明らかである。準拠論モデル論が教えるところによ
れば、藤原淑子や藤原氏などの悲話が、この桐壺更衣の物語の前
提だとされている。例えば日本紀略では、

・己卯、女御從四位下藤原朝臣沢子卒、故紀伊守從五位下繪繼之女也、天皇納之誕三皇子一皇女（宗康、時康、康新子也）寵愛之隆、独冠後宮、俄病而困篤、載之小車、出自禁中、纒到里第一、便絶、天皇聞之哀悼、遣中使贈從二位也、遣使監護喪事、（仁明、承和六年六月三十日）

・辛酉、未剋、女御藤原低子卒、大納言爲光卿女也、懷孕之間、日来病惱、天下哀之、件喪家：廿二日乙丑、贈故女御低子從四位上、（一條、寛和元年七月十八日）

などが記されている。もとより、これらの事実の経過をのべるのみの記事からも我々は、さまざまの想像を掻き立てられる。実際の説話はもっとふくらみもあっただろうし、伝承者の立場によって内容も随分異つたものであつたかもしれない。大鏡・宋華物語からうかがいうる後宮世界には、こうした記事から推察できる更衣説話の、広がり求められる共感の素地は充分に存在したのであろう。源氏物語が桐壺更衣の死によってひらかれ始めるということは、そうした更衣説話を文学的受感をもって受けとめ、更には物語の始発として据えていく、まさしくはげしい動的な過程を経ているのであろうと考へられるが、桐壺更衣物語が、どのような立場・視角から捉え直され、どこがどのように堰きとめられ、そうすることによって何が籠められるのか、ということとはこうした単なる事実のなりゆきだけを

「記す記事との対比によってより鮮やかに浮かび上つてくる。帝に里の有様と若宮の様子を報告するために今まさに帰らんとするゆげひの命婦をひきとめひきとめ、更衣の母君は縷々としてつぶやく。

くれ惑ふ心の闇も：かへすぐつれなき命にも侍るかな。むまれし時より、おもふ心ありし人にて、故大納言：「この人の宮仕への本意、かならず：」：「はかしくしう、後見おもふ人なきまじらひは、なかなかなるべきこと」とおもう給へながら：「いだしたて侍りしを、身にあまるまでの御心ざしの、よろづにかたじけなきに、人げなき恥をかくしつゝまじらひたまふめるを、人の嫉み深く安からぬこと多くなり添ひ侍るに、よこざまなるやうにて遂にかくなり侍りぬれば、かへりてはつらくなむ、かしこき御心ざしを思ひ給へ侍る。これも、わりなき心の闇に。」

桐壺更衣の死が後宮の構造を窺いませにされていることにすぐれた形象力があるということもまた論じられてきた。一家の果せなかつた夢へのぐちめいた、更衣母のことばの中に更衣の死へのすさまじく社会的な認識の確かさがみられる。なかでも重大な事柄は、更衣が誰彼の手にかかって死んだわけではない、しかし老いて死んだのではない——近代的に言えば殺されたとする形象的認識の強い確信が見られるということである。「横さまなる」死とは単なる死ではない。人為のという気持が含まれているだろう。つまり、更衣の母

のしかも私的なぐちともつかぬ恨みごととして表現される他のない、死への認識と、その死を悼む気持の深さは、そのような論理的な死をもたらすに躊躇せぬ物語宮廷社会の存否が問われるというよりは、前提たるその社会が揺がぬ壁として意識されるためなのであろう。

「横ざまなる」更衣の死の悲話は、きなめて論理的ならざるをえないかわりに、際立って、野分以下の段が——草高く涙顔に虫のすだく里の夜のわずかな、命婦とそれに向かつてもはやひとりつぶやくことしか知らない母君のことばの流れが——いよいよ詩的であることを強調する。そしてそうした堰きとめがまた、典拠たる長恨歌の世界を引き離す力として働いているのだ。かくて、仮借ない後宮社会の秩序の論理に対して詩的に高まった、更衣の生き方の追認——「かたじけなき御心はへの類なきを頼みて」帝にすぎり、自滅さえ覚悟するような強い意志——つまり更衣がついに救われなかつたことによって、その救われぬものへの限らない共感の重さを荷つるはじめて「前の世の御契りや深かりけむ」と、光源氏の誕生は語り出されるのである。

註

- ① 小谷野純一氏『二松舎学舎大学論集』昭和四五年「紫式部論序説」、同氏『古代文化』十二号「紫式部に於ける歌」

紫式部の表現

清水好子氏『紫式部』一〇〇頁、一一九頁、
南波浩先生『紫式部集』（岩波文庫）一九八頁。

② 岡一男氏『二松舎学舎大学東洋学研究所集刊』第二集「源氏物語」創作へ紫式部を駆り立てたもの。」

③ 清水好子氏『紫式部』第一章、

南波浩先生『紫式部集』二〇二頁。

④ 紫式部集の本文引用、番号は南波先生『紫式部集の研究』（笠間書院）による。

⑤ 註③に同じ。清水氏、九一—九三頁。

⑥ 新古今集一七八七番清慎公、「道芝の露と争ふ我が身かな何れかまづはきえむとすらむ」、が類似の発想である。

⑦ 例えば、清水文雄氏校訂岩波文庫によれば、一六一・一七八・一八五・二一五・六四七・六九六・七一〇・九三七・一三七

三などは疫病流行に際しての危機的な不安に色彩られている。

⑧ 『紫式部集評釈』一一九頁。

⑨ 『新訂版、貫之全歌集』萩谷朴氏校註の番号による。

⑩ 日本古典文学大系所収、『和泉式部日記』遠藤嘉基氏を引用。

⑪ 註⑩に同じ。三八九頁。

⑫ 唐木順三氏『日本人の心の歴史、補遺』「和泉式部の季節」、三四頁。

⑬ 『日本文学』七二、十月号「紫式部日記」の情動の構造、四六頁。

⑭ 源氏物語のうたには、作中人物が死者の追慕にうたった歌が少しく見られる。これは季節のみに限定できない自然の問題を含んでいる。(引用の頁数は岩波文庫(一) 尋ね行くまぼろしもがな伝にても)

魂のありかをそこと知るべく

(源氏物語桐壺巻二七頁)

なき魂ぞいとゞ悲しき寝し床の

あくがれがたき心ならひに

(葬巻三四一頁)

大空を通ふまぼろし夢にだに

見えこぬ魂のゆくへ尋ねよ

(幻巻三二二頁)

などが「魂」の語のみられる例である。悲嘆を掻き消さんとして作中人物のうたう歌の表現は、これらの例に関する限り、和泉式部のうたのそれと近似した性格を持っていることは注意される。もっとも、和泉式部の歌には遊離魂の発想があることが指摘されている。しかし、紫式部の家集には、そうした発想の歌は、宣孝追悼に関して一首も見ることができない。この事実

もまた、きわだった、死に対する認識の相異を示している、とともに、紫式部の物語の虚構の問題と関わっている。

⑮ 桂宮本叢書第九卷「私家集九」による。

⑯ 源氏物語講座第六卷「紫式部集」一五二—一五三頁。

⑰ 源氏物語講座第一卷「源氏物語における虚構の方法」二八頁、三〇頁。

⑱ 註③に同じ。一〇一頁。清水氏

⑲ 「科学と思想」九号「『ものあはれ』論の序章」、七五頁。

⑳ 註⑰に同じ。三一頁。

㉑ 高橋和夫氏、「桐壺巻の構成について」「源氏物語の主題と構

想」一〇一頁、藤井貞和氏、「国語通信」一四九号、二頁。

㉒ 「源氏物語」「桐壺」の作品構造をめぐって、日本文学研究資

料叢書、「源氏物語Ⅰ」二九三頁。

㉓ 山中裕氏、源氏物語講座第六卷「源氏物語の時代」二〇三頁。

㉔ 藤井貞和氏「源氏物語の始原と現在」「源氏物語の端緒の成

立」一二七頁。

㉕ 山岸徳平氏校注、岩波文庫(一)、二三頁。

㉖ 『日本文学』七三、十月号「光源氏前史」鈴木日出男氏、西

郷信綱氏「日本古代文学史」二二三頁、益田勝実氏「火山列島

の思想」「日知りの裔の物語」一九六頁。